

## 審査の結果の要旨

氏名 森 朋子

本論文は、大字を基礎とする集落の保全手法に関して、岐阜県所在の世界遺産集落である五箇山の相倉・菅沼集落とその周辺集落群が持つ特性に着目して、地域読解の新しい手法とそれをもとにした新しい集落保全手法の提案を行ったものである。

論文は、序章とそれに続く2つの部から成っている。第1部は研究の背景を論じた2つの章から成っている。第2部は具体的なケーススタディを論じた5つの章と結章から成っている。

序章は、研究の目的と方法、既往研究、ケーススタディの対象地である五箇山の概要について述べている。研究の目的として、地域社会における基礎的行政単位であり、地域空間を構成する単位でもある大字に着目し、現代社会における動態的保全に向けて、山村集落の計画的保全手法に新たな知見を得ることと規定している。

第1章は、第1部の始まりとして、集落研究の基礎としての農村空間論のあり方を論じ、農村計画において蓄積されてきた知見がようやく集落保全へと活かされることになりつつある現況を明らかにしている。

第2章では、集落保全制度の変遷を振り返り、今日の集落保全制度が有する課題を明らかにしている。特に、伝統的建造物群保存地区制度創設時に構想されたより広い「集落町並」の概念に着目し、集落の価値付けを行うために当該概念の現時点における再興を行うことを論じている。

第3章は、第2部の出発点として、五箇山の事例において、集落の空間構造を明らかにしてその秩序性を抽出するための手法について考察している。主たる分析は、明治8年の地引絵図をもとに2つの合掌集落の秩序性を抽出していることである。その結果、ムラ・ノラ・ヤマの各空間において、固定されたムラ空間に一定の秩序が存在し、ノラ・ヤマ空間には旧来の機能を変動させている現状が明らかになった。

第4章は、大字が有する集落の単位性を明らかにするために、近世の村高、地形と流域との関係、集落内の組と推理との関係に着目して、地域は各レベルの社会単位の集合体としてとらえることが可能であり、水利という核を基礎に構成された大字単位の空間が基礎となっていることを証明している。

第5章は、集落の近代以降の変化に着目し、その要因を明らかにすることを目指している。特にムラ空間の発展と縮退が集落の核となる中心エリアを軸に発生していることを明

らかにしている。

第6章は、集落の構成とその変化の根底に存在する一定の傾向に着目し、これを集落が持つ集団的な「意図」と定義し、大字空間とは、共同体が「意図」した自然と共同体との関係のありかたそのものであることを明らかにしている。

第7章は、新たな共同体の構築過程におけるひとつの手法として集落の保全をとりあげ、意図的共同体創造のために有用な手段として集落保全を位置づけ、これを周辺集落群へ段階的に拡大している方途について論じている。

以上、本論文は、五箇山地域の集落構造を解明する新しい方法論を提示することによって、集落の現代的な解釈とその価値を明らかにし、集落保全の動的なメカニズムを提示することによって、大字を基礎とする集落保全とそこから展開する地域計画のあり方を提示することに成功しており、優れた論文として高く評価することができる。

よって本論文は博士（工学）の学位申請論文として合格と認められる。